南アフリカ新聞号外①

# SABONA

鈴木　壮太

こんにちは。今回は号外です。通常の新聞は小学校低学年の児童にも読みやすいように作成していますが、アフリカについてもっと詳しく、少し踏み込んだ（つもりの）内容を書いていこうと考えて、号外を作成することにしました。（通常の新聞と内容が重複する場合もありますが、通常版の内容を補足できると思います。）

私は昨年７月より南アフリカ共和国で活動をしていますが、活動の要請内容は「教員への助言を通じて、児童の算数の学力向上に取り組む。」というものです。

号外初号のテーマは「算数教育の実態」です。私が通っている２つの小学校の実態ですので、南ア全体がそうであるとは言えませんが、少なくても任地の実態は伝えられるかと思います。

## まずは南アの算数の力を世界のランキングで見てみましょう

２０１５年、世界協力開発機構（OECD）は、世界７６の国と地域で１５歳の生徒を対象に学習到達度調査（PISA）を行いました。数学と科学に基づいた結果がこちら。

１位　シンガポール
２位　香港
３位　韓国
４位　日本、台湾
：
75 位　南アフリカ共和国

７６の国と地域のうち南アは７５位。このように、南アには算数が苦手な子どもが多いのです。なぜでしょう。

## 算数が苦手な理由

### 理由①「母語のスワジ語を読めない」

低学年の子どもたちは、教科書に書いてあるような基本的なスワジ語をよく理解できません。算数の問題を解く前に、問題文の意味を理解するのに多くの時間がかかります。（幼い頃から文字に触れることが極端に少ない。）

### 理由②「普段の生活に数字がない」

子どもたちは１日の中で数字にほとんど触れません。例えば日本では、教室の時計（時間・時刻）、身体測定（高さ・重さ）、体力測定（速さ・距離）、番号（順列※名前の順、背の順）等、多くの場面で数字に触れますが、アフリカの子どもたちは生活の中で算数の授業以外に数字に触れることがほとんどなく、数感覚が非常に乏しいのが特徴です。

### 理由③「授業中は座って先生の話を聞くだけ（という場合が多い）」

日本のように、算数セットを使ったり、自分の考えや意見を発表したり、隣やグループの友だちと話し合ったりすることはあまりありません。先生の話をじっと聞き、その後問題を解く。というのがほとんどです。具体物を実際に操作する活動がないため、数感覚を習得しにくい状況です。早く問題が解き終わった児童はその後ぼーっとして過ごします。逆に終わらないと、先生に叱られてしまいます。子どもたちは先生に叱られるのが怖いので（体罰も多い）、隣の友だちの答えを写します。（教員が適切な指導法を知らない。）

### 理由④「４年生からいきなり英語で授業」

３年生までは算数を含めスワジ語で教わりますが、４年生から急に全ての授業は英語で行われるようになります（教科書も英語表記）。そのため、ここでつまずいてしまう児童も多いのが現状です。

### 理由⑤「教員の教育に対する意識の問題」

文化的な側面が大きいのかもしれませんが、教員は授業中でも会議中でもメールが来たら返信し、電話が鳴ったら出ます。それが授業中の場合、児童は放置されます。教員が疲れたと感じたら児童に自習をさせ、教員は休憩してしまうこともあります。また、学校生活において児童が主体となって物事に取り組むことは少なく、教員に言われたことに従って行動するしかないため、自分で物事を考えて行動する力が身に付きにくいのかもしれません。

南アフリカ新聞号外②

# SABONA

鈴木　壮太

今回は、南アの教員の給与について書きます。現地の教員はどれくらいの給与を受け取っているのか、またどんなことにお金を消費しているのか気になったので、聞いてみました。

## 果たしていくら？

各州によって、給与制度の仕組みが異なるかもしれませんが、私の活動している州の公立小学校教員の給与制度を紹介します。

例えば 58 歳の教員（32 年勤務）の月収は約 R26,000 で、日本円にして約 22 万 6 千円（1 ランド 0.87 円計算）。給与明細を拝見させてもらったところ、額面給与から保険料や税金等が差し引かれ、手取り給与は約 R15,000（約 13 万円）。南アでは年齢は関係なく、勤務年数によって給与が変わってくるそうです。小学校の場合、学級担任から順に、学年主任、副校長、校長と階級があり、学級担任と学年主任では同じ勤務年数であっても月収に R1,000（約 8,700 円）の差があります。学年主任と副校長の差額は R2,000（約 17,400 円）です。

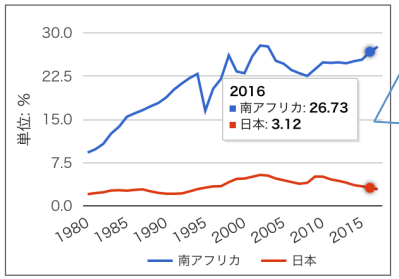
## お金の使い道

現地教員の様子を見ると、遠くから歩いたり、同僚の車に同乗したりして学校に来る人もいれば、アウディやベンツ、BMW 等の高級な欧州車で学校に来る人もいます。また、大きな庭のある立派な家に住んでいる人もいれば、そうではない人もいます。

彼らにとって家庭をもち、立派な家、高級な車に乗ることが人の地位と成功を示すようで、とくに車にかける情熱は凄まじいです。例えば、同僚が高級車を買って学校に乗ってくると、他の同僚たちはその同僚に祝福の言葉を送ることもあるそうです。そのため、お金は車のローン（一括で購入することは滅多にない）や家に使い、その他は生活費に当てたり、貯金をしたりします。

しかし、車や家にお金をかけられない人も勿論います。例えば女性教員の方で、旦那が無職、息子たちの職もなく、息子に妻と子どもがいる場合、その女性教員１人で家族を支えることになります。１人で家族を支えるとなると、生活はやはり大変だと思います。このように職のない家族を養うケースはよくあるらしく、また、兄弟の数が非常に多いことも経済的に苦しくなる原因のようです（５人兄弟くらいは一般的）。

【南アと日本の失業率の比較】




©世界経済のネタ帳

2016 年で比較すると、日本の失業率が約３%に対して南アは約２７%です。南アの就労意欲を失った人を含めると約４０%にのぼります。確かに、昼間なのにどこか暇そうにしている男性をよく見かけます。

このように現地の教員の方と話す中で、家族の人数や家族の働き手の人数によって、お金の使い方が大きく異なることを知ることができ、私自身大変勉強になります。

南アフリカ新聞号外③

# SABONA

鈴木　壮太

任地の算数教育の実態パート２です。今回は定期テストやワークブック、また、算数セット等の教具についてです。

## Q. 児童を評価するための定期テストはどのようなものか？

学期末に必ずテストを行います。このテストの難易度は高くはないと思うのですが、そのまま児童にテストを行わせると多くの児童があまり問題を解けずに終わってしまいます。そのため、担任は全員にテストを配った後、テストの内容を入念に確認します。たまに答えを言うこともあります。そして、いよいよ児童が解き始めますが、多くの児童が解けない問題があると、また答えを教える場合があります（黒板に書いた解法と答えはその後消します）。その後、テストを終えた児童は担任に答案用紙を見せに行きますが、あまりに答えが違う場合は、担任がその児童に解き方を教えた後、その児童をまた席に戻しテストをやり直しさせます。これを繰り返して児童の多くは何とか良い点を獲得します。個別に教員に解法を教えてもらっても、記入欄に答えを書けない児童は、落第の可能性があります。学期末テストはいつもこのような感じです。ちなみに児童はカンニングします。しかしカンニング先の答えが間違っていることが多く、あまり意味はなさそうです。

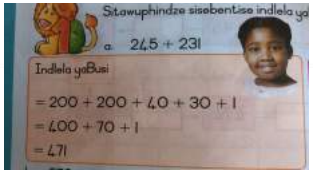
このような具合なので、テストは形式的なものに過ぎないかもしれません。テストの平均点が低いと、その学校長の教育事務所からの印象が下がり、出世の機会を逃してしまいます。そのため校長は自分の昇進、もしくは校長の座を守るために、テストの結果を求めます。こうして意味の薄いテストが存在しています。もし、日本のようにただテストを配って児童に行わせた場合の平均点は３０点、もしくはそれ以下になってしまうのではないかと予想しています。

## Q. 学校長や教育事務所はその現状を知っているのか。

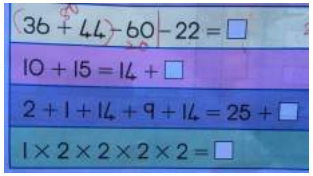
教育事務所は分からないのですが、少なくとも学校長は、このような現状を黙認しているのだと思います。私の想像に過ぎませんが、おそらく教育事務所も知ってのことだと思います。ただ、まれにテスト期間に教育事務所の人が来てテストの様子を見に来るそうですが、そのとき担任はテストの説明をできないようです。一応教育事務所の人は、不正がないように監視しようとする姿勢は見せているのかもしれません。また低学年においては、テスト前に、テスト内容の説明を行っても良いことになっているようです。理由は、問題文を読んでも問われていることが理解できない児童が多いからだそうです。スワジ語（現地語）を理解できていない児童に、算数の問題を出しても確かに解けないことは理解できます。そしてようやく現地語を習得し始めた４年生からは、テストの問いが英文になります。児童は英語の能力が高くないので、これまた問いの意味が分かりません。そのため、言語習得が追いつかない状況でどの学年もテストを行っていることになります。そう考えると、答えに近いものを教えるのはどうかと思いますが、テスト前の教員の説明は必要になってくるかもしれません。

## Q. 児童が普段使用している算数のワークブックはどのようなものか？

ワークブックは、質が良いとは言えません。進度が早かったり、児童の思考の流れに沿っていなかったりする部分も多いように感じます。また、誤字脱字もしばしば見られます。そのようなミスがあってもなかなか修正されず、教員も児童も混乱してしまうことがあります。しかし、日本のように話されている言語が１つなら良いのですが、南アには１１個の言語があります。これを作成する側も大変だと思うので、内容が分かりにくくても、ワークブックが１１言語分あるだけでもありがたいことかもしれません。




245 の 1 の位 5 の足し忘れが!




黄色部分。答えがマイナス

## Q. なぜ教具を使わないのか？

算数セットが置いてあるクラスでも、現地の教員が指導を通してそれらの教具を用いることはほとんどありません。使い方がわからないのに加え、その方法を勉強するのも億劫に感じているのかもしれません。なぜなら教えている教員は、算数セットを使わなくても計算式を解くことができるからです（当たり前ですが）。時間をかけてわざわざ具体物を操作させなくても、口頭で手短に教えた方が楽ですし、確かにそれで数人の児童は理解できてしまいます。このように、子供の思考の流れに合わせて指導をするのは彼らにとって今のところ難しい、というより、その部分に意識がないように思われます。具体物を操作させることの重要性を教員に理解してもらうことには苦戦しています。

逆に教具をそこまで準備しなくてもできる掛け算の学習なら、現地教員にも負担が少ないのではないかと思い、最近実践しています。教員の反応は良いです。かけ算の学習は、１の段から９の段までの指導法がほぼ同じなので、現地教員にも分かりやすいですし、教材を用意する手間もあまりかかりません。これなら自分にもできそうと思ってもらえたようです。というのも、前任校で私が教えた３年生が九九を唱える動画を見せたのがきっかけで、教員の意欲が出てきたようです。同じ南アの、しかも隣の小学校の児童がすらすらと九九を唱える様子を見て、親近感が湧いたのでしょうか。外国人である日本人が提案するものは今ひとつの反応の場合がありますが、同じ境遇の児童が日本人の指導により、ある程度成果が見られたのを知ると、それなら私たちもやってみたいと思ったようです。

## Q. 算数セットの導入だけでは効果は薄いか？

現在 NGO 団体と協力して算数セットの導入を試みようとしています。算数セットの導入についてはモデル校を設定して、その成果を他校に少しずつ広めていくと良いと思います。算数セットを用いた指導をすれば、子供たちが理解しやすいのは明らかです。算数セットが指導に活かされれば児童の数学力は格段に上がります。

導入する際の課題が以下の通りです。

① 管理面。算数セットの所有者が個人ではなく学校である場合、セットの中身に名前を描くことができず、中身の紛失が多くなる。

② 指導面。算数セットを送るだけでは現地教員がそれの使い方を把握できず、授業内で適切に使用されない。

③ 意識面。算数セットの有用性を現地教員に気付いてもらう必要がある。

④ 意欲面。有用性に加え、算数セットを用いた指導法を学ぶ意欲を教員にもってもらう必要性がある。

⑤ 組織面。算数セットの使用法、それを用いた指導法を紙媒体で渡しただけでは、現地教員に読んでもらえない。各校、算数セットを適切に扱える教員育成のための定期研修が必要。

⑥ 教材面。現ワークブックを使用しての指導では、進度が早く、算数セットが使いにくい場面が多い。ワークブックの質の向上が望ましい。

⑦ 言語面。３年生まで現地語、４年生以降は英語での学習だと、児童の言語能力が算数の内容に追いつかず、理解が大幅に遅れる。

等、課題は多くあります。私個人で解決できる課題はありません。そのため、配属先の小学校の一部の教員に「算数セットを使って授業してみたいな～。」と少しでも思ってもらえることが当面の目標となりそうです。しかし、今のところそれもやや困難に感じています。そこで次回はこれまで行ってきた【算数セット導入を視野に入れた活動】について、書きます。

教室の片隅で眠る算数セット

時刻と時間の授業にて、実際に児童に時計を操作させている様子。具体物があると児童の理解は早い。

算数セット（ブロック）を用いて１０を１つのまとまりとして捉えられるようにすることがねらいの１つ。

南アフリカ新聞号外④

# SABONA

鈴木　壮太

今回は算数セット導入を視野に入れた活動についてです。

## 算数セットをぜひ使って欲しい！！しかし…！

算数セットの有用性について気付いてもらい、それを授業に活かしてもらえたら…。何か良い方法はないのか…。どうすればもっと使ってもらえるのだろう…。と、色々と考え、現地教員と算数セットを用いた授業を一緒にしたり、ワークショップを開いたりしながら、算数セットの良さを積極的に伝えていました。「これを使ったら児童も分かりやすそう！」「使い方が具体的に分かって良かった！」と、教員の反応が良いのは事実です。しかし、その後の授業で使われることはありません。前回の号外⑤では、算数セット導入についての課題を挙げましたが、それらの課題を知ることはできても、私一人では解決できないようなものも多くあります。実際、算数セットを使わない理由を教員に直接聞いてみると、「それを使うのは良いと思うけど、使う時間がない。」とのこと。確かにその通りだと思います。以前にも書いたことですが、こちらの教員は授業中にほぼ全ての事務作業（採点、添削、評価等）を行います。そのため、いちいち算数セットを使って指導していては、準備、片付け等含め多くの時間がかかり、何より教員にとって面倒ですし、事務仕事をする時間がなくなってしまいます。

【写真】算数セットを使う児童の様子（２年生）。担任の話を聞くだけでは飽きてしまします。具体物を操作すると、より意欲的になるうえ、数感覚を養いやすい。

国際協力は、効果がすぐに出るものではないので、何年も継続していくことが必要です。ただ、算数セット導入についての課題を解決しないまま、それの普及のために活動しても、現地教員の負担になってしまう可能性の方が高いことに加え、効果があまりに薄いと感じていました。つまり現段階では、算数セットの導入は現地の実態に合っていないのかもしれません。しかし、算数セットによって児童の学力が向上するのは明らかで、現地教員もそれを少なからず把握しています。もう少し私自身が何か良い方法を見つけられれば良いのですが…。うーん…。と、あれこれ考えたり、同期に連絡してアドバイスをもらったりしながら活動しています。

## 一日

私が算数セットを使うことで、児童の学力、意欲ともに向上させられることは良いのですが、「教員の算数指導力向上」という点では行き詰まっていました。そこで、逆に具体物をそこまで使わずにできる算数指導法がないかと考え始めました。今までやっていたこととは真逆のことです。算数セットを用いた活動を少し休憩しました。

そこで、号外⑤でも触れましたが、かけ算の指導をすることにしました。数感覚が乏しい児童には、足し引き算が優先だと思うのは確かです。ただ、かけ算の単元に入ったし、やってみようと思いました。

そして私はかけ算学習の授業を行いました。教員の反応は良かったです。その場でいつも良い反応をしてくれる同僚たちは何とも温かく、私も嬉しいです。「せっかくアフリカにいるんだし、挑戦したいことは何でもやっていいよ。」と言ってくれます。そのような言葉をもらって私は試したいことを色々とさせてもらっています。

話は戻りますが、かけ算の指導はそこまで複雑ではないため、現地教員にもできるのではないかと考えました。私が授業をした翌日にその教員と一緒に授業を行い、その後担任だけで授業をしてもらいました。その方のおかげで（色々な教員に広めてくれた）、かけ算指導の小ブームが起こり、現段階では複数のクラスで私が伝えたかけ算指導が実践されています。一過性のものではなく、ボランティアがいなくなっても継続していけると幸いです。もしかしたら継続してくれるのではないかと淡い期待を寄せることとします。【次回：かけ算指導の流れについて】

南アフリカ新聞号外⑤

# SABONA

鈴木　壮太

今回はかけ算指導についてです！！

## かけ算指導を本格的にスタート

かけ算の学習が始まりました。まず何を目標に設定するかに迷いました。児童の算数力と授業時間を考慮に入れると、日本と同じ目標を設定することは難しいからです。最低限できてほしいことを考え、目標は、① かけ算の意味について知る。② かけ算九九について知り、１位数×１位数の計算をできるようにする。③ かけ算に関して成り立つ簡単な性質を知る。この３つを設定しました。現地教員に対する私の目標は① 指導法がとにかくシンプル。② 準備がいらない。③ 児童に分かりやすい。の３点です。アフリカでは日本の環境と驚くほどの違いがあります。現地教員の実態に合わせます。

## かけ算指導の活動の流れ

【① 打ち合わせ】

この打ち合わせのねらいは、担任にかけ算指導の流れを知って、見通しをもってもらうことです。資料にある細かいことは話しません。面倒だと感じさせないように注意して、「楽しそう」と、いくらかの意欲をもってもらえたら、初手の段階では十分です。

【② 私が何度か授業をする。】

何度か私１人で授業をしてみて、担任に見てもらいます。担任も授業に興味をもってくれるし、私の言葉の未熟な部分を現地語で説明し直してくれます。授業後もひとこと感想を言ってくれます。その度に、先生たちの優しさが心に染みます。そういう先生たちのフォローがたくさんあって、私の活動が成り立っています。

【③ 私と一緒に授業をする→担任だけで授業をする】

最初は、私に見られるのは恥ずかしいから嫌だと言っていましたが、授業が始まると児童の反応も良く、担任も楽しそうでした。授業は順調に進みました。私は、担任が授業の流れを忘れてしまったときに、少しアドバイスをするくらいです。あとは頷いて「大丈夫だよ」という合図を送りました。授業後に担任に感想を聞いたり、私の感想を話したりしました。最後に「ユーアーグレイトティーチャー」と、ひとこと添えて、お互い笑って無事終了。

【④ 教育実習生にもやってもらう】

たまたま教育実習生が学校に来ていたので、授業してみないか誘ってみたら、快く授業をしてくれました。実習中は児童のノート等の添削をするか、授業（ほぼ自習）を見学するだけだったので、授業をする機会があっても良いのにと思ったのがきっかけです。ちなみに彼女にとって初めての現場での授業です。初陣です。私の指導法を気に入ってくれて、なぜか彼女の息子の家庭教師を頼まれました。

【⑤ かけ算九九の暗唱】

ここからが重要です。授業を通してかけ算の意味や、かけ算の性質等を学習しました。しかし授業をしたからといって九九がすらすらと暗唱できるわけではありません。いかに児童のモチベーションを高めながら、継続して暗唱の練習をさせるかがポイントです。正直なところ、児童は九九を覚えることが途中で飽きてしまうのではないか、担任もそれに比例して指導をする意欲をなくしてしまうのではないかと不安でした。

【⑥ 奇跡】

児童が練習を繰り返すうちに１人の先生が言いました。「こんなにできるようになったのだから、ぜひ全校集会でみんなにかけ算九九を披露したい。」そのアイディアが私にはありませんでした。かけ算指導をそこまで喜んでやってくれていることが何より嬉しかったです。その先生は全校の前でフラッシュカードを用いて九九を紹介したり、代表の児童を選んで九九を唱えさせたりする機会を設けました。だれも２年生がここまでかけ算ができるようになるとは思っていなかったようで、教員、児童共に歓喜。その日以来、自分もみんなの前で九九を唱えたいという思いが彼らのモチベーション維持に見事に繋がりました。彼女のおかげで、かけ算指導に興味をもつ教員が増えて、活動の幅も広がりました。

南アフリカ新聞号外⑦

# SABONA

鈴木　壮太

時々、協力隊に参加しようとした理由を聞かれることがあるので、ここに書きます。

## なぜ協力隊に？

協力隊に応募した理由は、以前から国際協力について興味があり、発展途上国のために何か力になりたいと思ったから。というような立派な理由ではありません。本当のことを言うと、私は元々国際協力についてまともに勉強したこともなく、そこまで強い関心もありませんでした。ではなぜか。簡単に言うと、今しかできないことに挑戦したいと強く思うようになったからです。とても自分本位な考えなので、人に協力隊に参加した理由を聞かれると答えに詰まってしまうのが正直なところです。

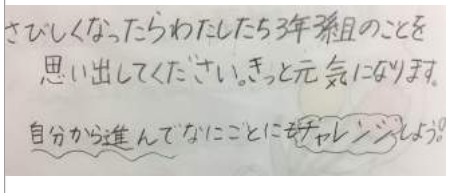
私は社会人に成り立ての頃、海外の旅や生活について書かれたノンフィクションを読むのに凝ってしまい、たまたまどこかの書評サイトで紹介されていた「パリでメシを食う。」という本を買って読みました。内容を大雑把に言うと、著者の川内有緒さん含み、パリで生きる数名の日本人の生き様が書かれた本です。この本を読みながら、「この人たちかっこいいな～。自分も海外で彼らみたいに生きてみたい！」などと、笑われてしまうかもしれませんが１人で考えていました。この本が、私が海外に対する興味をもつ１番のきっかけとなったのは間違いなさそうです。

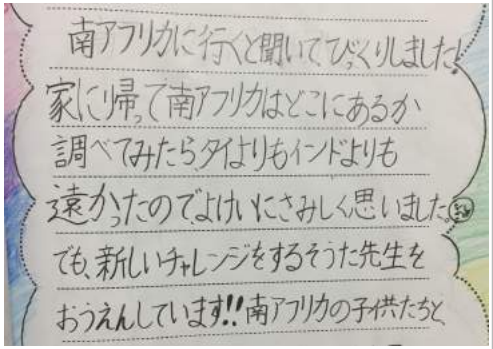
自分のそれまでの経験を振り返っても、大きな挫折も、必死に何かに取り組んだ経験もとくに思い出せません。それは、それまで何かに挑戦することもなく、何となく過ごしてきたからのように思います。高校も大学も少し勉強すれば入れそうな学校を志望。大学時代も何となく過ごし、過ぎ去り、そのまま教員になりました。教団に立って将来を担う子どもを指導していくには自分の経験値が少なすぎました。もちろん４年間の学校現場では同僚の方々に感謝しきれない程お世話になり、指導をいただき、私自身努力もしてきたつもりです。現場で働いた４年間が、生きてきた中で最も充実した日々であったのも確かです。しかし、なかなか自分に自信をもてずにいました。そのため、挑戦したいことに向かって考え、行動に移せる自分であることを確かめることで、自分に自信をもたせたかったのかもしれません。

今までは、一度は行ってみたい場所、やってみたいことが本当はあるのに、「でもそんな時間ない」とか、「でもきっとそんなことにあまり価値はない」とか、「でも失敗して後悔するかもしれない」とか、とにかく「でも」という言葉を使って諦める理由を探してばかりでした。しかし今はそういう自分を少しずつ変えられている気がします。

教員４年目に担任したクラスの学級目標は「自分から進んで」というものでした。たまたま私自身の目標と重なったこともあり、いつも以上に児童に学級目標を意識させながら１年間指導していたことを思い出します。やっとここに来て私もこの目標に近づいている気がします。残りの任期、全力で活動をし続けたら、目標達成ということにします。

担任していた児童からもらった手紙を時々読んで自分に喝を入れます。



南アフリカ新聞号外⑧

# SABONA

鈴木　壮太

「しばらく６年生のクラスの教員が休むから明日から６年生の算数教えてくれるか？」と、いつもの調子で急にお願いされました。急なお願いはもう慣れっこ…。というわけにはいかず、いつまで経っても慣れません。元々の予定を急に変更するのは少しやっかいです。しかし私が断ってしまうと、６年生の算数の授業が全て自習になります。そうなると教室内が混沌としてしまうため、担当教員が休みの１週間だけ６年生の算数指導をすることになりました。初めてのクラスで授業をするあのドキドキ感が好きです。最近は５年生や７年生のクラスで授業をしていたこともあり、６年生のクラスでも私のことを認識してくれました。名前を呼んでくれる子、笑顔で迎え入れてくれる子、不安そうな表情の子、チャイナ！と叫ぶ子、様々でした。

今回は、そんな６年生との授業と、その課題について書きます。

## ６年生との授業がスタート！しかし…

### ＜宿題について＞

６年生指導初日。前日に算数担当教員（４年生から教科担任制）から出された宿題の確認から始めることにしました。しかし児童のワークブックを見てみると、ほぼ空欄もしくは雑な字で適当に記入してあるだけでした。９０％以上の児童が宿題をきちんとやってきません。なぜでしょう。児童に聞いてみると、いつも予習として宿題（ものすごく多い量で驚きました。）をやってくるとのことで、量の多い、内容の分からない宿題を出されることで、宿題に対するやる気を失ってしまうのでしょう。教員が予習として宿題を出し、仮に児童がそれをきちんとこなしてくる場合、教員はある程度ラクに授業が進められるかもしれません。しかし、予習としての宿題は児童の実態に合っておらず、負担が大きすぎます。

【算数担当教師への提案】

- 算数担当教員と共に、宿題の量と内容について確認し合う必要がある。
- 宿題を出したら翌日に全員分添削（もしくは確認）する。確認できないのであれば、宿題は出さない。児童は宿題をやってもやらなくても教員にチェックされない、もしくは評価されない場合、やる気を失う。
- 始めのうちは、５分あれば終わりそうな宿題で良い。こっそり授業の合間等に学校でやる児童が増える可能性があるが、初手の段階では翌日までに宿題が終わっていれば良いことにする。
- 既習事項の復習として宿題を出す。（予習では負担が大きい。）

### ＜授業を受ける態度＞

授業開始とともに、児童は起立してあいさつをします。しかし、友だちと話しながら席を立つ児童もいれば、起立しない児童もいて、あいさつの段階からぐだぐだでした。授業のあいさつがしっかりできるようになるまで、何度もあいさつをさせます。始めはそれだけに５分ほどかかっていました。ワークブックのページを開くだけでも教室がざわつきます。何か指示を出すたびに教室がにぎやかになっていては授業が成立しません。教科書をすぐさま閉じさせて、また指示をし直します。問題を解いている最中に友だちと話している場合は、その場で立たせました。厳しいようですが、授業を受ける態度は徹底します。しかし、文句を言う児童は １ 人もいませんでした。話もよく聞くようになってきたし、積極的に挙手もするし、頑張ろうとする子が多かったように思います。しかし、いくら児童に対し

て学習規律を身に付けさせようとしても、教員が授業中に頻繁に教室からいなくなってしまったり、電話をし始めてしまったりしたら説得力がありません。当たり前ですが教員が授業中にしっかり授業をする必要があります。まずは教員の授業に対する姿勢を改めない限りは、児童に指導していくことは難しいです。しかし、こちらの文化では仕事より私用が優先されることがしばしばあります。息子の結婚式の準備のためクラスを自習にしたり、車の修理をするから早めに帰ってしまったり…。クラスの児童が教室に放置されてしまう原因のひとつです。

【児童への指導と教員への提案】

- 無駄話をしない。（徹底する）
- 教員は授業中に授業をする。（少なくても教室内にいる。）
- 教員が教室を空ける場合は自習を用意する。

集中して問題を解く６年生児童。紙の向きと書く姿勢が独特。

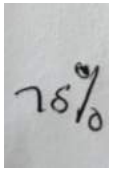
割合、百分率（%）の学習。

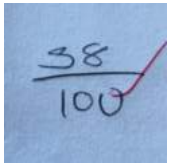
## ＜文字指導＞

児童の書く字が読みにくいことがあります。少し書き方にクセがあるのと、単に雑なのが混ざって、読みにくく感じます。日本のようにきちんと文字指導を受けることなく、そのまま学年が上がっていってしまうことが原因のひとつかもしれません。ということで、字を丁寧に書かないと読み手に伝わらないため、読みやすい字で書くように伝えました。そして、丁寧に書いてきた児童をしっかりと評価していきます。

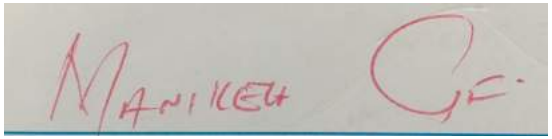
【教員への提案】

- 読みやすい字で書かせる。そしてそれを評価し、習慣づけていく。



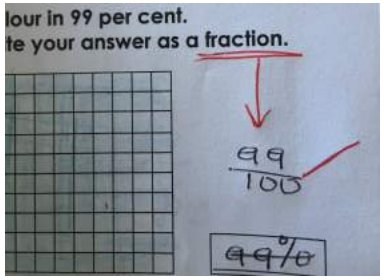




数字が読みにくい。左の数字は７５%と書かれたもの。右の数字の分子は５８。始めのうちは現地の人が書く数字を読むのに一苦労。とくに5と7が読みにくい。



教科書に書かれた名前。最初のMA以外理解するのに時間がかかる。

まずは自分の名前をきちんと書かせる。




間違えた回答をそのままにせず、正答を必ず書くようにする。

いつも始めのうちは算数指導の前に、基本的な学習規律についての指導が主になります。１週間では短すぎるので半年くらいは彼らと授業がしたいところではあります。授業をメインで行ったこの１週間は、とても充実していたのは確かです。内心はもっと授業をたくさんやりたいのですが、私がいる間だけ児童の学力を上げても持続可能な支援にはなりません。そのため、再び教員への働きかけの方に重点を置き直していきます。

高学年を教える際の難しい点は、児童が既習事項を理解できていない状況でカリキュラム通りに授業を進めなければならないことです。基本的な足し算引き算ができない児童に対して、割合の単元を教えるのは難しかったため、本当に基礎的な部分しか教えることができませんでした。しかし６年生と過ごす中で、活動に関する課題も見つけることができ、私自身とても勉強になる１週間でした。

南アフリカ新聞号外⑨

# SABONA

鈴木　壮太

これまでは、南ア教育の課題について書くことがほとんどでしたが、今回は少し日本と比べながら、現地の学校現場について良いと思ったところを紹介します。

## ここがいいよ南アの学校！

### その１：喧嘩はするが、いじめがない！

こちらでは、友達を無視したり仲間はずれにしたりする場面を見たことがありません。また、同僚に聞いてもそのようなことはまず起こらないと言います。日本ではそういういじめが多くあることを伝えると、喧嘩すればいいのにどうしてしないの？無視することに何の意味があるの？とのこと。確かに子供たちが喧嘩をしている場面をよく見ます。女子も男子も力任せに叩いたり蹴ったりと、けっこう激しいです。そしてその後、担任に怒られます。しかしひと段落すると、彼らはいつも通り仲良く遊び始めます。非常に関係がさっぱりしているように見えます。

私の感覚からすると、無視したり仲間はずれにしたりすることで、精神的に相手を傷つけることになると思いますが、こちらでは無視をすることに何の意味もないようです。無視されたら、無視した子に対して手を出すし、仮にそのコミュニティを失っても、他の友達と遊ぶようになるでしょう。また、子供はその他にもたくさんのコミュニティをもっています（兄弟、家族、親戚、近所の人たち、教会のメンバー等）。どことなく、地域が大きな家族のような雰囲気さえあります。仮に小さなコミュニティと仲良くできなくても、他に逃げ場が多くあります。日本では地域との関わりや家族とのコミュニケーションも減り、クラスの小さなグループに属してないと、他に属する場所が見つけにくく、逃げ場があまりないように思います。

喧嘩中。この後、担任に叱られる。

言い争いをしている。

この写真のように、よく喧嘩して、言いたいことを言い合って、お互いにたくましくなりながら友情を深めていきます。

### その２：元気！（体調を崩して学校を休まない）

体調を崩して休む子供がとても少ないです。給食の時間にスナック菓子を食べていて、栄養をしっかり取れていないように感じますが、なぜかいつも元気なのが不思議です。よく外で遊ぶからでしょうか。

### その３：親や教員など、大人に逆らわない！

大人の言うことは絶対で、大人の権限が強いです。日本では子供の意見や思いを丁寧に聞いていくことも多いと思います。しかし、こちらは完全に大人優先。子供はわがままなことを言ったり、指示を聞かなかったりすると、こっぴどく叱られます。お母さんたちもなかなか激しくて、我が子を思い切り叩きます。

## その４：好きにする！（群れない）

群れないというより、休み時間が１日に１回しかないので、群れるタイミングがないのかもしれません。基本的に、友達に合わせるというより、自分の興味のあること、したいことを優先します。また、給食を１人で食べることも珍しくありません。写真は休み時間の子供たちの様子。

１人だから寂しい、可哀想ということはない。無理にグループに入らなくてよい。気ままに食事を楽しむ。

何人かで一緒にいるようだが、これは個人の集まりなのでグループとは少し違う。友達が近くにいれば話し始める。

もちろんグループで食べることもある。

給食をシェアすることもある。

## その５：伸び伸びしている！（やや伸びすぎ）

日本の学校には数え切れないほどのルールがあり、それに従わなければなりませんが、こちらではルールが非常に少なく、あったとしても曖昧。良くも悪くも、あれやっちゃだめ、これやっちゃだめ、というのが少なく、幼い頃からわんぱくします。そしてよくケガもします。

## その６：大人の心にゆとりがある！（良くも悪くも）

教員は授業準備をあまりしません。学校行事もほとんどないので、それに向けた準備もありません。校務分掌（業務分担）もほぼありません。残業もありません。教員に限らず、私の住む地域では大人はせかせかと仕事をせず、ゆったりと働きます。

## その７：子供が精神的にタフ！

叱られても、喧嘩しても、失敗しても、すぐに元気を取り戻します。元気を取り戻すというより、そういうことがあっても落ち込まないといった方が良いかもしれません。よく言えばさっぱりしています。悪く言えばあまり反省しません。ただ、普段の生活環境や家庭環境を考えると、子供ながらに多くの苦労（子供は苦労とは思わず当たり前に感じているのかもしれない）があるため、ちょっとのことでは動じないのかもしれません。基本的に大人も子供もプラス思考である印象です。

## その８：毎朝祈る！

教員は毎朝のショートミーティングの始めに、聖歌を歌い神に祈りを捧げます。児童も登校して教室に入ると祈ります。祈ることは毎日欠かしません。みんな信仰深く、神を信じています。宗教は彼らの心の大きな支えになっています。私は祈り方がよくわからないので、このときは大人しくしています。

## その９：PTA 活動がなく、保護者の負担が少ない！

保護者が、今年は役員にならないといけないとか、役員だから学校に行かないといけないとか、懇談会で多くの保護者の前で色々と話さなければいけないとか、そういうプレッシャーを感じなくて済みます。（日本の PTA 役員の方はとても大変そうなイメージ。）

以上で、南アの学校現場の良いところの紹介を終わります。課題も多いかもしれませんが、良いところも多くあります。